

とカットフィルターを使用せずポルフィリン由来の赤色蛍光が癌組織に散在するのが観察され、内視鏡ファイバースコープ下でも観察が可能であった。

27. 新しい Zinc finger motif をもつ Mel-18 遺伝子産物の解析

長谷川正行 (千大)

新しい Zinc finger family に属する Mel-18 遺伝子産物の細胞増殖における機能の解析を行なったので報告する。まず、以下を NIH3T3 に導入した細胞株を樹立した。(1) Mel-18 の cDNA 全長 (sense), (2) 逆向きの mRNA が転写される anti-sense, (3) N 末の Zinc finger と NLS よりなる truncated。これらの細胞株について、ヌードマウスに対する腫瘍形成, low serum 培養下での cell cycle analysis などについて検討したので報告する。

28. 超音波内視鏡下穿刺法の研究

原田 昇 (千大)

超音波内視鏡下穿刺法を研究し、超音波画像診断と病理組織学的診断を組み合わせた新たな超音波内視鏡診断体系を確立することを目的に、基礎的検討、臨床応用および機器の開発をおこなった。基礎的検討で、超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診が可能であることをモデルで示した。臨床例の検討では、嚢胞性疾患の吸引細胞診で良好な結果を得た。実質性組織の検体採取、病理組織診断には、新たに組織生検針を開発し、良好な結果を得た。

29. 開胸手術視野からみた気管支動脈の解剖学的検討

舟波 裕 (千大)

食道癌手術での気管支動脈温存のための解剖学的検討を行った。成人遺体71体の肉眼的検討では、肋間気管支動脈を93.0%が、大動脈分岐枝を右気管支動脈では74.6%が、左では全例が有した。1本1本でみると肋間気管支動脈の98.5%で106と107番リンパ節の解剖学的範囲内を走行せず、大動脈分岐枝では多くが両範囲を走行し肋間気管支動脈は気管分岐部前面に分布し、大動脈分岐枝との交通が観察された。

30. 回腸子宮内膜症によるイレウスの1例

青木泰斗, 関 幸雄, 丸山達興
山本義一, 小森章寿, 上野博一
(川鉄千葉)

患者は32歳、女性。腹痛、嘔吐を主訴として来院、手

術を施行した。閉塞部位は腫瘤により腸管が屈曲、狭窄していた。病理組織学的検査の結果、回腸子宮内膜症と診断された。本邦報告21例について検討した。主訴は腹痛が76%を占め、また、イレウスを発症したものは、52%であった。術前正診し得たものは14%と少なかった。

31. 巨大脾嚢胞の1例

有馬秀明, 小澤弘侑, 飯野正敏
木村正幸, 村岡 実, 佐野友昭
黒田浩明, 森川丘道 (沼津市立)

症例は24歳、女性。既往歴なし、1月前から左季肋部腫瘤に気付き圧痛も出現した為、当院受診、胸部X線・胃透視・DIP・腹部エコー・腹部CT・腹腔動脈造影を施行し、単房性脾嚢胞と診断、正中切開し1750mlの漿液性内容物を吸引後、脾臓摘出。大きさ17×16cm、内腔は重層扁平上皮で被われ、類上皮嚢胞であった。本邦報告623例を集計し、1890～1986年468例とその後5年間155例を比較すると、中高年層・無症状で偶然発見される、径5cm以下、内皮性真性嚢胞の報告増加を認めた。これはエコー・CT等の普及・進歩によるものと思われる。手術適応・術式及び皮膚切開に対する検討が必要と思われる。

32. 胆汁中に虫卵を認めた総胆管癌の1例

大瀧 徹, 川村 功, 宮沢幸正
佐久間洋一 (石橋総合)

67歳、女。フナ、鳥肉の生食を好む。1991年12月、黄疸、発熱にて入院。エコー、CTにて、総胆管内に腫瘤陰影を認めた。PTCD造影で、中部胆管に完全閉塞像を呈し、胆汁細胞診よりclass IVの所見と同時に、肝吸虫の虫卵を多数認めた。膵頭十二指腸切除術を施行。癌部は長径約1.5cmで中部胆管を中心に乳頭状に発育、一部胆嚢管へ浸潤、高分化型乳頭状腺癌であった。他臓器浸潤、リンパ節転移はなく、術後9カ月現在再発を認めない。

33. 外科的ドレナージにて救命し得た重症急性膵炎の1例

金子健太郎, 紅谷 明, 菊地浩之
(塩谷総合)

症例は52歳、男性。特に誘因なく左側胸痛にて発症。内科にて約3週間の保存的治療続けるも改善せず外科転科となる。入院時検査所見は WBC 10000/mm³, Ht 31%, T. P. 4.9g/dl, s-AMY 2549IU/L, Ca 3.91mg